

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（二十一）：「出塞」二首・「入塞」二首・「折楊柳」一首
Author(s)	小川, 恒男
Citation	中國中世文學研究, 69 : 94 - 114
Issue Date	2017-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00043764
Right	
Relation	



六朝樂府詠注（二十一） — 「出塞」二首・「入塞」二首・「折楊柳」一首 —

小川恒男

はしがき

本稿では隋・虞世基「出塞」二首其二の後に楊素「出塞」二首其二の詠注を附録として掲載した。前稿の「はしがき」でも触れたように、『樂府詩集』には楊素の「出塞」を一首しか収めないが、『古詩紀』卷百三十一によつて補った。その他に北周・王褒と隋・何妥の「入塞」を一首ずつ。梁・元帝「折楊柳」一首を収めた。底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

隋・虞世基「出塞」二首其二

【本文及び書き下し】

- 1 上将三略遠 上将 三略 遠く
- 2 元戎九命尊 元戎 九命 尊し
- 3 緬懷古人節 緬かに懐ふ 古人の節
- 4 思酬明主恩 酬いんと思ふ 明主の恩
- 5 山西多勇氣 山西 勇氣多く
- 6 塞北有遊魂 塞北 遊魂有り
- 7 揚桴度隴坂 桴を揚げて 隴坂を度り
- 8 勒騎上平原 騎を勒めて 平原を上る

- 9 誓將絶沙漠 將に誓ひて 沙漠を絶り
- 10 悠然去玉門 悠然として 玉門を去る
- 11 輕齎不違舍 輕齎 舍つるに違あらず
- 12 驚策驚戎軒 驚策 戎軒を驚す
- 13 懷懷辺風急 懷懷として 辺風 急に
- 14 蕭蕭征馬煩 蕭蕭として 征馬 煩る
- 15 雪暗天山道 雪は暗し 天山の道
- 16 氷塞交河源 氷は塞ぐ 交河の源
- 17 霧烽黯無色 霧烽 黯くして 色無く
- 18 霜旗凍不翻 霜旗 凍りて 翻らず
- 19 耿介倚長劍 耿介 長劍に倚り
- 20 日落風塵昏 日 落ちて 風塵 昏し

【日本語訳】

- 1 司令官でもある上将軍は兵法が深遠で
- 2 尊くも最高位の官爵にある
- 3 遙か昔の人の節操を心に抱き
- 4 聡明な君主の恩愛に酬いたいと思っておられる
- 5 崑山・華山以西は勇者を輩出する気に満ちており
- 6 万里の長城以北には戦死者の魂が残っている

- 7 撥を振りかざし太鼓を打ち鳴らして隴坂を越え
- 8 騎兵を率いて平原に上っていく
- 9 砂漠を横断することを將軍に誓い
- 10 あつという間に玉門関を通り過ぎる
- 11 携帯用食糧を捨て去る暇さえなく
- 12 さつと翻るムチが兵車を疾走させる
- 13 辺地を吹き渡る厳しい風は慌ただしく
- 14 遠く出征してきた馬は嘶く
- 15 降りつる雪のために天山への路は闇に包まれ
- 16 氷が交河の水源を閉ざしてしまう
- 17 霧がかかった峰々は暗くなって色彩を失い
- 18 霜の降りた軍旗は凍ってまったく翻らない
- 19 けれども、勇者は意気軒昂として長劍によりかかる
- 20 日が沈み砂埃が風に舞う闇の中で

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十七・『古詩紀』卷百三十四・

『唐詩品彙』卷一

0 「虞世基」、『品彙』作「虞世南」。

5 「勇」、『英華』作「虜」。

7 「度」、『詩紀』注云「一作『上』」。

8 「騎」、底本注云「一作『馬』」。上、「詩紀」注云「一作『下』」。

【押韻】

「尊」「魂」「門」「昏」、上平二十三魂韻。「恩」、上

平二十四痕韻。「原」「軒」「煩」「源」「翻」、上平二十二元韻。元・痕・魂同用。

【作者】

五五二？六一八。陳及び隋の政治家。字は茂世。会稽余姚（浙江省余姚市）の人。父の荔は陳代の文人、弟は「初唐の三大家」の一人として著名な書家、虞世南。陳の宣帝の太建の初め頃、弟世南とともに顧野王に師事し、若くして博学、草隸を善くし、孔奐や徐陵の知る所となった。太建四年頃、陳の建安王の法曹参军となり、太子中庶子、尚書左丞を歴任した。陳が滅びると、隋に仕えて通直郎となったが、家が貧しかったので、書物を書写して家族を養った。煬帝が即位すると内史侍郎に抜擢され、政權の中心を担った。大業八（六一二）年の高句麗遠征の際には金紫光禄大夫に昇進したが、この頃から煬帝の失政が続くようになり、煬帝が宇文化及に殺されると、世基も同じく殺された。

【語釈】

1 上将三略遠 2 元戎九命尊

「上将」上将軍の略。前稿に訳出した隋・薛道衡「出塞」二首其一にも「高秋白露団、上将出長安（高秋

白露 団として、上将 長安を出づ）」と見えた。「三略」古い兵法書の名。上略・中略・下略からなっ

ていた。『隋書』経籍志三に「黄石公三略」三卷、下邳神人撰、成氏注。」と見えるが、今は佚す。転

じて広く兵法をいう。三国魏・李康「運命論」(『文選』卷五十三)に「張良受黄石之符、誦『三略』之說、以游於群雄。(張良 黄石の符を受け、『三略』の說を誦して、以て群雄に遊ぶ。)」とあり、李善注に「『黄石公記』序曰、『黄石者、神人也。有上略・中略・下略』。(『黄石公記』序に曰く、『黄石は、神人なり。上略・中略・下略有り。』)」と。

「元戎」大きな兵車。『詩経』小雅・六月に「元戎十乘、以先啓行(元戎 十乗、以て先づ行を啓く)」とある。転じて司令官をいう。陳・徐陵「移齊王」に「我之元戎上將、協力同心、承稟朝謨、致行明罰。(我の元戎上將、力を協はせ心を同じくし、朝謨を承稟し、行ひを致し罰を明らかにす。)」と見える。

「九命」周代には九等の官爵があり、その最高位を「九命」と称した。『大戴礼記』朝事に「諸侯之得失治乱定、然後明九命之賞以勸之。(諸侯の得失治乱定まり、然る後 九命の賞を明らかにして以て之れを勸む。)」と。

3 緬懷古人節 4 思酬明主恩

「緬懷」遙かに思いを馳せる。晋・陶潜「扇上画贊」周陽珪に「緬懷千載、託契孤遊(緬かに千載を懐ひ、契に託して孤り遊ばん)」

「古人節」昔の人の節操。『後漢書』黄琬伝に「吾雖不徳、誠慕古人之節。(吾 不徳なりと雖も、誠に「酬明主恩」立派な君主の恩にお返しをする。「酬恩」、

梁・吳均「辺城將」詩四首其二に「徒傾七尺命、酬恩終自寡(徒に傾く 七尺の命、恩に酬いること 終に自ら寡し)」とある。「明主恩」、聡明な君主の恩愛。梁・梁・江淹「雜體詩」三十首(『文選』卷三十一)左記室思詠史に「珪組賢君眄、青紫明主恩(珪組は賢君の眄、青紫は明主の恩)」

5 山西多勇氣 6 塞北有遊魂

「山西」戦国から漢代にかけて崤山・華山以西を「山西」「関西」と称した。古来多くの名将を出したところと考えられてきた。『漢書』趙充国伝贊に「秦漢以來、山東出相、山西出將。(秦漢以來、山東相を出だし、山西 將を出だす。)」とある。

「多勇氣」山西の地は何者をも恐れない気概に満ちている。右に引いた『漢書』趙充国伝贊の続きに「山西天水・隴西・安定・北地処勢迫近羌胡、民俗修習戰備、高上勇力鞍馬騎射。(山西の天水・隴西・安定・北地は処勢 羌胡に迫近し、民俗 戦備を修習し、勇力鞍馬騎射を高上す。)」と見える。

「塞北」万里の長城以北を指す。三国魏・曹操「却東西門行」に「鴻雁出塞北、乃在無人郷(鴻雁 塞北に出で、乃ち無人の郷に在り)」と。

「遊魂」遊魂とも。身体を離れた魂。『易』繫辭伝上に「精氣為物、遊魂為變。(精氣 物と為り、遊魂 變を為す。)」と見える。ここは戦死者の魂。

7 揚桴度隴坂 8 勒騎上平原

「揚桴」太鼓を打ち鳴らすバチを高く挙げる。『楚辭』九歌・東皇太一に「揚枹兮拊鼓、疏緩節兮安歌(枹を揚げて鼓を拊ち、節を疏緩にして安歌す)」と。

「隴坂」陝西省と甘肅省との間にある山の名。隴坻、隴山とも。唐・杜佑『通典』卷一百七十四に「天水郡…有大坂、名曰隴坻、亦曰隴山。(天水郡…大坂有り、名づけて隴坻と曰ひ、亦た隴山と曰ふ。)。また、『太平御覽』卷五十六に引く「三秦記」に「其坂九廻、不知高幾里。欲上者七日乃越。高処可容百余家、下処数十万戸。上有清水四注。俗歌曰、『隴頭流水、鳴声幽咽。遥望秦川、心肝断絶』。去長安千里、望秦川如帶。又関中人上隴者、還望故乡悲思、而歌則有絶死者。(其の坂 九廻し、高きこと幾里なるかを知らず。上らんと欲する者 七日にして乃ち越ゆ。高き処は百余家を容るべく、下き処は数十万戸。上に清水の四もに注ぐ有り。俗歌に曰く、『隴頭流水、鳴声 幽咽す。遙かに秦川を望めば、心肝 断絶す』と。長安を去ること千里、秦川を望めば帯の如し。又た関中の人 隴に上れば、故乡を還望して悲思し、而も歌へば則ち絶死する者有り。)」

「勒騎」騎兵を率いる。六朝詩には他の用例は見当たらない。「勒」、手綱を引いて馬を統御する。

9 誓將絶沙漠 10 悠然去玉門

「誓將」將軍に誓う。漢・班固「東都賦」(『文選』卷一)に「駢部曲、列校隊、勒三軍、誓將帥。(部曲を駢べ、校隊を列ね、三軍を勒し、將帥に誓ふ。)」とある。

「絶沙漠」砂漠を渡る。前稿に掲載した薛道衡「出塞」二首其二にも「直指夫人城、絶漠三秋暮(直ちに指す 夫人の城、漠を絶る 三秋の暮れ)」とあった。『後漢書』西域伝序に「浮河絶漠、窮破虜庭。(河に浮かび漠を絶り、虜庭を窮破す。)」とあり、李賢注に「沙土曰漠、直度曰絶也。(沙土を漠と曰ひ、直ちに度るを絶と曰ふなり。)」という。

「悠然」普通はゆったりと落ち着いた様をいうが、前後から考えて、ここはあつという間に。すばやい様をいう。王雲路『六朝詩歌語詞研究』(黒龍江教育出版社 一九九九)に隋・孔徳紹「王沢嶺遭洪水」詩の「地籟風声急、天津雲色愁(地籟 風声 急に、天津 雲色 愁ふ)」を引いた上で「悠然」猶倏忽、迅速的様子。」とする。

「玉門」関所の名。甘肅省敦煌の南西にあった。『史記』大宛列伝に「於是酒泉列亭鄣至玉門矣。(是に於いて酒泉より列亭鄣を列ねて玉門に至る。)」とあり、『集解』に「韋昭曰、『玉門関、在龍勒界』。(韋昭 曰く、『玉門関、龍勒の界に在り。』)」と。詩では梁・虞羲「詠霍將軍北伐詩」(『文選』卷二十一)に「玉門罷斥候、甲第始修營(玉門 斥候を罷め、甲第 始めて修營す)」と見えるのが早いよ

うである。詩では「玉関」とも。こちらにも梁の頃から用いられるようになったようである。

11 輕齋不違舍 12 驚策驚戎軒

〔輕齋〕携帯用の食糧。『漢書』霍去病伝に「約輕齋、絶大幕。（輕齋を約し、大幕を絶る。）」とあり、顔師古注に「輕齋者、不以輜重自隨、而所齋糧食少也。一曰齋字与資同、謂資裝也。（輕齋は、輜重を以て自ら随はしめず、而も齋す所の糧食 少なきなり。一に曰く 齋字 資と同じ、装に資するを謂ふなり、と。）」とある。六朝詩では他の用例は見当たらない。

〔不違舍〕捨てる暇がない。「舍」、捨に通じる。

〔驚策〕サツと振り上げられたムチ。「驚」、馬を走らせるための竹製のムチ。六朝詩には見当たらないが、晋・潘尼「釣賦」に「曜靈未及驚策、蓋已獲其数十。（曜靈も未だ策を驚かすに及ばざるに、蓋し已に其の数十を獲しならん。）」と見える。

〔驚戎軒〕兵車を疾走させる。「驚」は速く走らせる。

〔戎軒〕は戦車、兵車。晋・陸機「漢高祖功臣頌」(『文選』卷四十七)に「戎軒肇迹、荷策来附。（戎軒は迹を肇め、策を荷ひて来たり附く。）」とあり、梁・王筠「侍宴餞臨川王北伐伋詔」詩に「周驚戎車、漢馳羽檄（周は戎車を驚せ、漢は羽檄を馳せり）」と。

〔雨雪曲〕に「風哀笳弄断、雪暗馬行遲（風 哀しくして 笳 弄断し、雪 暗くして 馬 行くこと 遅し）」と。

〔天山〕新疆ウイグル自治区を走る山脈の名。『漢書』武帝紀に「(天漢二年)夏五月、貳師將軍三万騎出酒泉、与右賢王戰於天山。(夏五月、貳師將軍の三万騎 酒泉を出で、右賢王と天山に戦ふ。）」とあり、顔師古注に「晋灼曰、『在西域、近蒲類国、去長安八千余里』。師古曰、『即祁連山也。匈奴謂天為祁連。……今鮮卑語尚然』。(晋灼 曰く、『西域に在り、蒲類国に近く、長安を去ること八千余里』と。師古 曰く、『即ち祁連山なり。匈奴 天を謂ひて祁連と為す。……今の鮮卑語 尚ほ然り』と。)」というが、『補注』は「齊召南曰、『案、晋灼說是、師古說非也。此天山即白山』。(齊召南 曰く、『案するに、晋灼の説 是にして、師古の説 非なり。此の天山は即ち白山なり』と。)」とす

〔氷塞〕川が凍って水が流れなくなる。宋・鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷十七)に「氷塞長河、雪滿群山。」と。

〔交河〕新疆ウイグル自治区吐魯番(トルファン)市の西、約一〇キロのところにあった交河城をめぐる川の名。『漢書』西域伝下に「車師前国、王治交河城。河水分流繞城下、故号交河。(車師前国、王の治 交河城。河水 分流して城下を繞り、故に交河

13 懷懷辺風急 14 蕭蕭征馬煩

〔懷懷〕風が冷たく厳しい様をいう。晋・陸機「文賦」(『文選』卷十七)に「心懷懷以懷霜、志眇眇而臨雲。(心 懷懷として以て霜を懷き、志 眇眇として雲に臨む。）」とあり、李善注に「『說文』曰、『懷懷、寒也。』」という。『說文解字』十一篇下・大部に「瘼、寒也。」とあり、段注に「俗字作懷懷」と。

〔辺風〕辺地に吹き渡る風。宋・鮑照「蕪城賦」(『文選』卷十一)に「辺風急兮城上寒、井逕滅兮丘隴殘(辺風 急にして 城上 寒く、井逕 滅びて 丘隴 残なはる)」とある。

〔蕭蕭〕馬の嘶く声。『詩經』小雅・車攻に「蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌(蕭蕭として 馬 鳴き、悠悠たる旆旌。)」

〔征馬煩〕遠く出征した馬が疲れ果てる。「征馬」は軍馬、また遠くまで旅をした馬。梁・江淹「征怨」詩に「何日辺塵淨、庭前征馬還(何れの日か 辺塵 淨く、庭前に 征馬 還らん)」とあり、三国魏・曹植「洛神賦」(『文選』卷十九)に「日既西傾、車殆馬煩。(日 既に西に傾き、車は殆く 馬は煩る。)」と。

15 雪暗天山道 16 氷塞交河源

〔雪暗〕雪が降りしきり前が見えなくなる。陳・江暉

と号す。)。梁・范雲「効古」詩(『文選』卷三十一)に「風断陰山樹、霧失交河城(風は断つ 陰山の樹、霧に失ふ 交河の城)」と。

17 霧烽黯無色 18 霜旗凍不翻

〔霧烽〕霧に見え隠れる烽火。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔黯無色〕辺りが暗くなり色彩が失われる。「黯」は暗いの意。梁・江淹「応謝主簿騷体」に「芝原寂少色、筠庭黯無光(芝原 寂として 色を少き、筠庭 黯くして 光無し)」と。

〔霜旗〕霜が降りた軍旗。六朝詩には他の用例は見当たらない。

〔凍不翻〕旗が凍り付いて翻らない。陳・江総「驄馬驅」に「白登困轉急、黄河凍不乾(白登 困み 轉た急に、黄河 凍りて乾かず)」と。

19 耿介倚長劍 20 日落風塵昏

〔耿介〕志操堅固な様。双声。ここは勇武の人をいう。梁・徐悱「古意酬到長史溉登琅邪城」詩(『文選』卷二十二)に「少年負壯氣、耿介立衝冠(少年 壯氣を負み、耿介として 立ちて冠を衝かんとす)」とあり、李善注は「韓子曰、『耿介之士』」と五蠹篇の語を引く。

〔倚長劍〕長い劍を頼りにすつくと立つ。梁・江淹「雜體詩」三十首(『文選』卷三十一)「鮑參軍昭戎行」

に「息徒税征駕、倚劍臨八荒（徒を息はして征駕を税し、劍に倚りて八荒に臨む）」とあり、李善注は宋玉「大言賦」に「方地為輿、員天為蓋、長劍耿介、倚天之外。（方地を輿と為し、員天を蓋と為し、長劍耿介、天の外に倚る。）」（『古文苑』卷二「員」作「圓」、「耿介」作「耿耿」。）とあるのを引く。「風塵昏」風に舞い上がる砂埃のために辺りが更に暗くなる。宋・南平王劉鑠「代收淚就長路」詩に「黃塵昏白日、悲風起浮雲（黄塵に白日昏く、悲風に浮雲起こる）」と。

【附】隋・楊素「出塞」二首其二

【本文及び書き下し】

- 1 漢虜未和親 漢と虜と 未だ和親せず
- 2 憂国不憂身 国を憂ひて身を憂へず
- 3 握手河梁上 手を河梁の上に握り
- 4 窮涯北海滨 涯を北海の浜に窮む
- 5 抛鞍独懷古 鞍に抛りて独り懷古し
- 6 慷慨感良臣 慷慨して良臣に感ず
- 7 歴覽多旧迹 歴覽すれば 旧迹多く
- 8 風日慘愁人 風日 愁人慘まし
- 9 荒塞空千里 荒塞 千里空しく
- 10 孤城絶四隣 孤城 四隣に絶す
- 11 樹寒偏易古 樹 寒たくして 偏に古へに易ふ
- 12 草衰恒不春 草 衰ふるも 恒に春ならず
- 13 交河明月夜 交河 明月の夜

- 14 陰山苦霧辰 陰山 苦霧の辰
- 15 雁飛南入漢 雁 飛んで 南のかた漢に入り
- 16 水流西咽秦 水 流れて 西のかた秦に咽ぶ
- 17 風霜久行役 風霜 行役を久しくし
- 18 河朔備艱辛 河朔 艱辛に備ふ
- 19 薄暮辺声起 薄暮 辺声 起こり
- 20 空飛胡騎塵 空しく飛ぶ 胡騎の塵

【日本語訳】

- 1 漢と遊牧民族とはまだ友好関係にないので
- 2 我が身を憂慮することはないけれども国のこと配でならない
- 3 川に架かる橋の上で互いに手を取って別れを告げ
- 4 最北の海辺まで行って世界の果てを窮めた
- 5 馬に跨がりひとりきり昔の人びとに思いを馳せては
- 6 古い時代の忠良の臣下に感動して溜め息をついた
- 7 あちこちを見て回れば歴史的な遺跡が数多く
- 8 彼の地の気候が心に愁いを抱いた人を傷付ける
- 9 辺境の荒れた砦の周囲千里には人の気配もなく
- 10 孤立した砦は四方の近場に住まう人もいない
- 11 樹々は寒さに葉を落としたが、やがて意外にも新しい葉と入れ代わるのだろうが
- 12 草は枯れ萎れて、永遠に生氣を取り戻すことはない
- 13 交河のあたりでは月が明るい夜を過ぎ
- 14 陰山のあたりでは苦しいほどの霧の朝を迎えた
- 15 雁は南に飛んで漢の地へ入り込んで行き

16 川は流れて西方の秦の地で咽び泣くような音をたてていた

- 17 風に吹かれ霜に打たれる厳しい兵役が長く続き
- 18 黄河の北で困難に備えた
- 19 夕暮れ迫る頃、胡笳の音や軍馬の嘶きが聞こえ
- 20 遊牧民族の騎馬がいたずらに砂塵を巻き上げるのだ

【校勘】

○『樂府詩集』不收本篇。今拠『古詩紀』卷百三十一。
『文苑英華』卷百九十七。
異同無し。

【押韻】

「親」「身」「浜」「臣」「人」「隣」「辰」「秦」「辛」「塵」、
上平十七真韻。「春」、上平十八諄韻。真・諄同用。

【作者】

？六〇六。隋の政治家、軍人であり、文章にも優れていた。楊堅（隋の文帝）を助けて隋の建国に貢献し、晋王広（後、煬帝）とともに南朝陳の討伐に活躍した。上柱国・御史大夫などを歴任し、尚書右僕射に上ると政權を掌握するに至り、皇太子勇を廢し次男である広を擁立した。しかし、即位後の煬帝に遠ざけられ、失意の内に死んだ。

【語釈】

1 漢虜未和親 2 憂国不憂身

「漢虜」漢と西北部の遊牧民族。一句、宋・鮑照「擬古」詩三首（『文選』卷三十一）其一到「漢虜方未和、辺城屢翻覆（漢虜 方に未だ和せず、辺城 屢しば翻覆す）」を踏まえる。

「和親」仲良くする。『史記』匈奴列伝に「高后欲擊之。諸將曰、『以高帝賢武、然尚困於平城』。於是高后乃止、復与匈奴和親。（高后 之れを撃たんと欲す。諸將 曰く、『高帝の賢武を以てして、然れども尚ほ平城に困しめり』と。是に於いて高后 乃ち止め、復た匈奴と和親す。）」と。

「憂国」国のことを憂慮する。三国魏・曹植「求自試表」（『文選』卷三十七）に「昔漢武為霍去病治第、辞曰、『匈奴未滅、臣無以家為』。固夫憂国忘家、捐軀濟難、忠臣之志也。（昔 漢武 霍去病の為に第を治む。辞して曰く、『匈奴 未だ滅びず、臣家を以て為す無し』と。固より夫れ国を憂へて家を忘れ、軀を捐てて難を濟ふは、忠臣の志なり。）」とある。

「憂身」自分自身のことを心配する。六朝詩には他の用例は見当たらない。

3 握手河梁上 4 窮涯北海滨

「握手」親愛の情を込めて手を握る。一句、次に引く李陵「与蘇武」詩を踏まえる。漢・蘇武「詩」四首（『文選』卷二十九）其三に「握手一長歎、涙為生

別滋（手を握りて一たび長歎すれば、涙 生別の為に滋し）」とあり、李善注は「繆賢曰、『燕王私握臣手』。（繆賢）曰く、『燕王 私かに臣の手を握る。』」と『史記』廉頗藺相如列伝の文を引く。

〔河梁上〕川に架かる橋の上。李陵「与蘇武」詩（『文選』卷二十九）三首其三に「携手上河梁、遊子暮何之（手を携へて河梁に上る、遊子 暮れに何くにかへく）」。

〔窮涯〕水際まで行く。地の果てまで行き着く。梁・任昉『王文憲集』序（『文選』卷四十六）に「窮涯而反、盈量知帰。（涯を窮めて反り、量に盈ちて帰るを知る。）」とあり、李善注は『莊子』山木に「市南子曰、『君其涉於江、而浮於海、望之而不見其崖、愈往而不知其所窮。送君者皆自崖而反』。（市南子 曰く、『君 其れ江をりて、海に浮かべば、之れを望みて其の崖を見ず、愈いよ往きて其の窮まる所を知らざらん。君を送る者 皆な崖よりして反らん』と。）」とあるのを引く。

〔北海浜〕北方の僻遠の地。『孟子』離婁上に「孟子曰、『伯夷辟紂居北海之浜』。（孟子 曰く、『伯夷 紂を辟けて北海の浜に居る』と。）」と見える。

5 拋鞍独懷古 6 慷慨感良臣

〔拋鞍〕馬の鞍に跨がる。転じて戦闘に耐える能力をいう。『後漢書』馬援伝に「二十四年、武威將軍劉尚擊武陵五溪蛮夷、深入、軍没、援因復請行。時年

慨而自印。（貫きて歴覽するに其れ中操なり、意は慷慨して自ら印る。）」とあり、晋・陶潜「癸卯歲十二月月中作与従弟敬遠」詩に「歴覽千載書、時時見遺烈（千載の書を歴覽すれば、時時 遺烈を見る）」と。

〔旧迹〕歴史的な出来事があつた場所。「旧迹」「旧蹟」とも。『後漢書』隗囂伝に「今天水完富、士馬最強、北収西河・上郡、東収三輔之地、案秦旧迹、表裏河山。（今 天水は完富にして、士馬 最も強く、北のかた西河・上郡を収め、東のかた三輔の地を収め、秦の旧迹を案じて、河山を表裏にす。）」と見える。また、隋・陰鏗「登武昌岸望」詩に「遊人試歴覽、旧迹已丘墟（遊人 試みに歴覽すれば、旧迹 已に丘墟なり）」とある。

〔風日〕風と日の光。転じて天候、氣候をいう。齊・王融「雜体、報范通直」詩に「紫庭風日好、青槐枝葉新（紫庭 風日 好く、青槐 枝葉 新たなり）」とある。

〔慘〕心を痛める。

〔愁人〕心に憂愁を抱える人。晋・傅玄「雜詩」（『文選』卷二十九）に「志士は日の短きを惜しみ、愁人は夜の長きを知る）」とある。

9 荒塞空千里 10 孤城絶四隣

〔荒塞〕荒れ果てた砦。六朝詩には他の用例は見当たらないが、『魏書』張普惠伝に「興師郊甸之内、遠

六十二、帝愍其老、未許之。援自請曰、『臣尚能被甲上馬』。帝令試之。援拋鞍顧眄、以示可用。帝笑曰、『矍鑠哉是翁也』。（二十四年、武威將軍劉尚武陵五溪の蛮夷を撃ち、深く入りて、軍 没し、援因りて復た行かんことを請ふ。時に年 六十二、帝 其の老いたるを愍れみ、未だ之れを許さず。援自ら請ひて曰く、『臣 尚ほ能く甲を被り馬に上る』と。帝 之れを試みしむ。援 鞍に抛りて顧眄し、以て用ふべきを示す。帝 笑ひて曰く、『矍鑠たるかな 是の翁や』と。）」とあるのに拠る。

〔懷古〕古い時代の人や事物を思い起こす。後漢・張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「望先帝之旧墟、慨長思而懷古。（先帝の旧墟を望み、慨して長く思ひて古へを懷ふ。）」と見え、詩では晋・陸機「吳王郎中時從梁陳作（吳王の郎中たりし時 梁陳に従ひて作る」詩（『文選』卷二十六）に「感物多遠念、慷慨懷古人（物に感じては遠念多く、慷慨して古人を懷ふ）」とある。

〔慷慨〕心に深く感じて嘆息する。双声。晋・陸機「門有車馬客行」（『文選』卷二十八）に「慷慨惟平生、俛仰独悲傷（慷慨して平生を惟ひ、俛仰して独り悲傷す）」と。

7 歴覽多旧迹 8 風日慘愁人

〔歴覽〕ひとつひとつ見て回る。漢・司馬相如「長門賦」（『文選』卷十六）に「貫歴覽其中操兮、意慷慨

投荒塞之外。（師を郊甸の内に興し、遠く荒塞の外に投ず。）」と見える。

〔孤城〕辺境の孤立した砦。北周・庾信「経陳思王墓」詩に「枯桑落古社、寒鳥帰孤城（枯桑 古社に落ち、寒鳥 孤城に帰る）」。

〔絶四隣〕周辺に住まう人々もない。「絶」はいなくなる。「四隣」は四方の近所。梁・朱超「舟中望月」詩に「大江闊千里、孤舟無四隣（大江 闊きこと千里、孤舟 四隣無し）」と見える。

11 樹寒偏易古 12 草衰恒不春

〔樹寒〕寒さのために木々の葉が落ちて貧相になる。庾信「從駕觀講武」詩に「樹寒条更直、山枯菊転芳（樹 寒くして 条 更に直く、山 枯れて 菊 転た芳し）」とある。

〔偏〕思いの外。

〔易古〕古いものを廃して新しいものと交替させる。『史記』趙世家に「変古之教、易古人道。（古への教へを変へ、古人の道を易ふ。）」と見える。ここは古い葉が散つて新しい葉と入れ代わること。

〔草衰〕草が萎れ枯れる。李陵「答蘇武書」（『文選』卷四十一）に「涼秋九月、塞外草衰。（涼秋九月、塞外 草 衰ふ。）」とあるのに拠るだろう。

〔不春〕生気がみなぎることはない。六朝詩にはあまり見られない用法。

13 交河明月夜 14 陰山苦霧辰

〔交河〕前詩第16句語釈参照。

〔明月夜〕明るい満月の夜。閨怨詩にしばしば見られる。齊・陸厥「李夫人及貴人歌」(『玉台』卷九)に「洞房明月夜、对此淚如珠(洞房 明月の夜、此れに對せば 涙 珠の如し)」と。

〔陰山〕内モンゴル自治区にある大山脈の名。漢代、匈奴防衛の要処だった。晋・陸機「飲馬長城窟行」(『文選』卷二十八)に「驅馬陟陰山、山高馬不前(馬を驅りて陰山に陟らんとするも、山 高くして 馬 前まず)」とあり、李善注は「侯応上書曰、

『臣聞北辺塞有陰山』。(侯応 上書して曰く、『臣聞く 北辺の塞に陰山有り』と。))と『漢書』匈奴伝下の文を引く。右にも引いたが、梁・范雲「効古」詩(『文選』卷三十一)に「風断陰山樹、霧失交河城(風は断つ 陰山の樹、霧に失ふ 交河の城)」と見える。

〔苦霧〕生き物を苦しめるほどの濃い霧。宋・鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷十四)に「嚴嚴苦霧、皎皎悲泉。(嚴嚴たる苦霧、皎皎たる悲泉。))とあり、李周翰注に「寒霧殺物、故云苦也。(寒霧 物を殺す、故に苦と云ふなり。))とある。また、同じく鮑照「詠双燕」詩二首其二に「陰山饒苦霧、危節多勁威(陰山 苦霧饒く、危節 勁威多し)」と。「危節」は「殺節」、寒い時期。

から西の秦(陝西省)の辺りに流れる川が咽び泣くような水音を立てる。隴頭は陝西省と甘肅省との間にある山の名。隴坻、隴山とも。唐・杜佑『通典』卷一百七十四に「天水郡……有大坂、名曰隴坻、亦曰隴山。(天水郡……大坂有り、名づけて隴坻と曰ひ、亦た隴山と曰ふ。))。また、『太平御覽』卷五十六に引く「三秦記」に「其坂九廻、不知高幾里。欲上者七日乃越。高処可容百余家、下処数十万戸。上有清水四注。俗歌曰、『隴頭流水、鳴声幽咽。遥望秦川、心肝断絶』。去長安千里、望秦川如帶。又関中人上隴者、還望故郷悲思、而歌則有絶死者。(其の坂 九廻し、高きこと幾里なるかを知らず。上らんと欲する者 七日にして乃ち越ゆ。高き処は百余家を容るべく、下き処は数十万戸。上に清水の四もに注ぐ有り。俗歌に曰く、『隴頭流水、鳴声 幽咽す。遥かに秦川を望めば、心肝 断絶す』と。長安を去ること千里、秦川を望めば帯の如し。又た関中の人 隴に上れば、故郷を還望して悲思し、而も歌へば則ち絶死する者有り。))。「俗歌」、遠欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』は晋詩に列す。

17 風霜久行役 18 河朔備艱辛

〔風霜〕吹きつける風と冷たい霜。多く艱難辛苦の比喩として用いられる。鮑照「代鳴雁行」に「憔悴容儀君不知、辛苦風霜亦何為(憔悴せる容儀も 君 知らず、辛苦 風霜も亦た何をか為さん)」と。

15 雁飛南入漢 16 水流西咽秦

〔雁飛〕秋、雁が北方の辺境の地から南に飛んでいく。

佐藤保『漢詩のイメージ』(大修館書店 一九九二)に「秋の訪れとともに北から飛んで来て、過ぎゆく春とともに北に帰って行く雁は、中国の渡り鳥の代表である。雁とまったく逆の動きをする燕とともに、季節の移り変わりを人々に知らせる候鳥―時候の変化とともに移り動く鳥―である。」とある。三国魏・曹植「雜詩」六首(『文選』卷二十九)其一に「孤雁飛南遊、過庭長哀吟(孤雁 飛びて南に遊ばんとし、庭を過りて長く哀吟す)」と。

〔南入漢〕漢の蘇武の故事を踏まえる。佐藤保前掲書に「しかし、なんといっても、雁の最も重要な、そして最も人びとに親しまれたイメージは、たよりを運ぶ鳥というイメージであろう。イメージをつくるものになった故事は、『漢書』蘇武伝に見える蘇武の事跡にもとづく。―前漢の時期に漢の使者として匈奴に赴いた蘇武は、そのまま匈奴の地に抑留され、遠く北海(バイカル湖)のほとりで羊を飼う仕事に従事していた。その間、漢はたびたび蘇武をかえすように求めたが、匈奴は蘇武はすでに死んでこの世にいないと答えた。ところが、たまたま天子の御苑の上林苑に飛んで来た雁の足に結びつけられていた手紙から蘇武の生存が確認され、蘇武は出国後十九年たつてようやく帰国することができた。」と。

〔西咽秦〕楽府「隴頭水」のイメージを用いる。隴頭

〔行役〕徵発されて遠方に赴き、長城の修築や国境の守備に従事すること。漢・蘇武「詩」四首(『文選』卷二十九)其三に「行役在戰場、相見未有期(行役して戰場に在れば、相見えんこと 未だ期有らず)」とあり、李善注は「詩経」魏風「陟岵」の「父曰嗟予子、行役夙夜無已(父は曰はん 嗟 予が子、行役して 夙夜 已む無けん」と)を引く。

〔河朔〕黄河以北の地をいう。漢代、匈奴防衛の最前線だった。晋・潘岳「河陽賦作」二首(『文選』卷二十六)其一に「昔倦都邑游、今掌河朔徭(昔は倦む 都邑の游に、今は 掌る 河朔の徭)」とあり、李善注は『尚書』泰誓中に「惟戊午、王次于河朔。(惟れ戊午、王 河朔に次る。))とあるのを引く。孔安国伝に「戊午渡河而誓、既誓而止於河之北。(戊午 河を渡りて誓ひ、既に誓ひて河の北に止まる。))とある。

〔備艱辛〕苦しみ、困難に備える。梁・何承天「有所思篇」に「哀我生、遭凶旻。幼罹荼毒、備艱辛(我が生を哀れみ、凶旻に遭ふ。幼くして荼毒に罹り、艱辛に備ふ)」と見える。

19 薄暮边声起 20 空飛胡騎塵

〔边声〕辺境で聞こえて来る胡笳などの楽器で演奏される音楽や馬の嘶き。李陵「答蘇武書」に「胡笳互動、牧馬悲鳴、吟嘯成群、边声四起。(胡笳 互ひに動き、牧馬 悲しく鳴き、吟嘯 群を成し、边声

四もに起こる。」とあり、呂向注に「笳曲馬鳴鼓吹之属。(笳曲馬鳴鼓吹の属なり。)」と。「飛胡騎塵」遊牧民族の騎馬が砂埃を舞い上げる。「飛塵」は舞い上がる砂塵。陳・後主叔宝「隴頭」に「驚風起嘶馬、苦霧雜飛塵(驚風 嘶馬を起こし、苦霧 飛塵を雜ふ)」と。「胡騎」遊牧民族の騎馬兵。梁・吳均「辺城將」詩四首其一に「塞外何紛紛、胡騎欲成群(塞外 何ぞ紛紛たる、胡騎 群を成さんと欲す)」と。

北周・王褒「入塞」

【本文及び書き下し】

- 1 戍久風塵色 戍まきり 久しくして 風塵の色あり
- 2 勳多意气豪 勳いさを多おほくして 意气 豪さかんなり
- 3 建章樓閣迴 建章 樓閣 迴たがく
- 4 長安陵樹高 長安 陵樹 高たかし
- 5 度氷傷馬骨 氷を度りて 馬骨を傷やなひ
- 6 經寒墜節旆 寒さきを經て 節旆せつひ墜おつ
- 7 行当見天子 行ゆく当あたりに天子を見ゆべし
- 8 無假用钱刀 錢刀を用ふるを假ある無し

【日本語訳】

- 1 国境の守備が長く続き、風に舞う砂埃の色が顔や手足にまで染み込んでしまったが
- 2 意気は盛んなので、しばしば勳功を挙げてきた
- 3 都にある建章宮の樓閣は高く立派で

からは関塞を描いた詩を多く残した。『周書』『北史』『梁書』に伝がある。

【語釈】

1 戍久風塵色 2 勳多意气豪

「戍久」辺境の守備が長くなる。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「風塵色」風に吹き上げられた砂塵の色。宋・吳邁遠「長相思」(『玉台』卷四)に「人馬風塵色、知從河塞還(人馬 風塵の色、知る河塞より還るを)」と。顔や体に砂埃の色が染まってしまったことをいう。

「意气」抱負と気概。宋・袁淑「效曹子建白馬篇」(『文選』卷三十一)に「意气深自負、背事郡邑權(意气 深く自ら負み、背て郡邑の權に事へんや)」とあり、李善注は謝承『後漢書』に「楊喬曰、『侯生為意气刎頸』。(楊喬 曰く、『侯生 意気の為に刎頸す』と。)」とあるのを引く。

3 建章樓閣迴 4 長安陵樹高

「建章」漢の長安の宮殿の名。『漢書』郊祀志下に「上還、以柏梁災故、受計甘泉。公孫卿曰、『黃帝就青靈台、十二日燒、黃帝乃治明庭。明庭、甘泉也』。方士多言古帝王有都甘泉者。其後天子又朝諸侯甘泉、甘泉作諸侯邸。勇之乃曰、『粵俗有火災、復起屋、必以大、用勝服之』。於是作建章宮、度為千門万户。

- 4 長安周辺の陵墓に植えられた樹木は高く育っている
- 5 凍った川を渡っては馬の骨まで傷付け
- 6 寒い冬を経て旗印の飾りがみな抜け落ちてしまった
- 7 やがて天子のお目に掛かることができるはず
- 8 金銭なんぞに頼らなくとも、この心意気さえあれば

【校勘】

- 『文苑英華』卷百九十七・『古詩紀』卷百二十三
- 3 「閣」、『英華』作「闕」。「迴」、『英華』注云「一作『近』、一作『廻』」。
- 6 「旆」、『英華』作「毛」。
- 8 「無」、『英華』作「何」。

【押韻】

「豪」「高」「旆」「刀」、下平六豪韻。

【作者】

五一三?〜五七六?。字は子淵、琅邪臨沂(山東省臨沂市)の人。梁の武帝はその才能を愛し、弟の潘陽王蕭恢の娘と娶せた。元帝の時には吏部尚書・左僕射に任じられた。承聖三(五五四)年、西魏の軍が江陵を陥落させると、降伏して長安に至る。庾信と並び称され、北朝でも優遇された。陳と北周とが和睦すると多くの南朝出身の文人が南方に帰ったが、庾信と王褒だけは帰ることができなかった。

梁にいた頃は華麗な詩風であったが、北朝に入っ

(上) 還り、柏梁の災ひの故を以て、計を甘泉に受く。公孫卿 曰く、『黃帝 青靈台を就すも、十二日にして燒け、黃帝 乃ち明庭に治む。明庭は、甘泉なり』と。方士 多く古への帝王の甘泉に都する者有るを言ふ。其の後 天子 又た諸侯を甘泉に朝せしめ、甘泉に諸侯の邸を作る。勇之 乃ち曰く、『粵の俗 火災有れば、復た屋を起つるに、必ず大なるを以てし、用て之れを勝服す』と。是に於いて建章宮を作り、度るに千門万户為り。』とあり、顔師古注に「就、成也。」と。

「樓閣」高い建物。あまり詩には見えないが、陳・沈炯「八音詩」に「金屋貯阿嬌、樓閣起迢迢(金屋 阿嬌を貯へ、樓閣 起つこと迢迢たり)」と。

「陵樹」天子の陵墓に植えられた樹木。長安の北には漢の高祖・惠帝・武帝・昭帝の陵園である五陵があり、南には宣帝の杜陵、文帝の霸陵があった。後漢・班固「西都賦」(『文選』卷一)に「南望杜霸、北眺五陵。(南のかた杜霸を望み、北のかた五陵を眺む。)」とあり、劉良注に「宣帝杜陵・文帝霸陵在南、高・惠・景・武・昭帝此五陵皆在北。」と。「陵樹」の語は齊・謝朓「同謝諮議詠銅爵台」詩(『文選』卷二十三)に「鬱鬱西陵樹、詎聞歌吹声(鬱鬱たり 西陵の樹、詎ぞ聞かん 歌吹の声)」と見える。

5 度氷傷馬骨 6 經寒墜節旆

「度氷」凍った川を渡る。

「傷馬骨」馬の骨までも傷付けてしまふ。三国魏・陳琳「飲馬長城窟行」（『玉台』卷一）の「飲馬長城窟、水寒傷馬骨（馬に飲ふ、長城の窟、水、寒くして、馬骨を傷なふ）」とあるのに拠る。

「経寒」冬を越す。六朝詩にはあまり用例は見られないが、陳・賀循「賦得夾池脩竹」詩に「逢秋葉不落、經寒色詎移（秋に逢ふも、葉は落ちず、寒きを経るも、色は詎ぞ移らん）」と。

「墜節旄」天子の命により他国に使者として赴く者が賜る旗を飾る旄牛（カラウシ）の尾の毛がすべて抜け落ちる。『漢書』蘇武伝に「（蘇武）杖漢節牧羊、臥起操持、節旄尽落。（漢節を杖つきて羊を牧し、臥起に操持し、節旄、尽く落つ。）」とあるのに拠る。『後漢書』光武紀に「十月、持節北度河、鎮慰州郡。（十月、節を持して北のかた河を度り、州郡を鎮慰す。）」とあり、その李賢注に「節、所以為信也。以竹為之、柄長八尺、以旄牛尾為其旄、三重。（節、信と為す所以なり。竹を以て之れを為り、柄長さ八尺、旄牛の尾を以て其の旄と為すこと、三重。）」と。

7 行当見天子 8 無假用錢刀

「行当」「将要」の意。間もなくするだろう、になるだろう。三国魏・繆襲「挽歌」詩（『文選』卷二十八）に「形容稍歇滅、齒髮行当墮（形容、稍く歇滅

し、齒髮、行ゆく当に墮つべし）」と見える。

「見天子」天子にお目に掛かる。梁・吳均「古意」詩二首其一に「何当見天子、画地取關西（何か当に天子に見え、地に画きて關西を取るべし）」と。

「無假」「不須」の意。くするに及ばない。北周・庾信「詠園花」詩に「自紅無假染、真白不須粧（自ら紅なれば、染むるを假る無く、真白、粧ふを須むず）」と。

「用钱刀」金銭に頼る。樂府古辭「白頭吟」（『玉台』卷一作「皚如山上雪」）に「男兒重意氣、何用钱刀為（男兒、意気を重んず、何ぞ錢刀を用て為さん）」とあるのを踏まえる。「錢刀」は金銭。古代、刀の形を模した錢があった。

隋・何妥「入塞」

【本文及び書き下し】

- 1 桃林千里陰 桃林 千里の陰
- 2 候騎乱紛紛 候騎 乱れて紛紛たり
- 3 問此将何事 問ふ 「此れ将に何をか事とせんとする」
- 4 嫖姚封冠軍 「嫖姚、冠軍に封ぜられたり
- 5 回旌引流電 回旌 流電を引き
- 6 帰蓋転行雲 帰蓋 行雲と転ず
- 7 待任蒼龍傑 蒼龍の傑に任ぜらるるを待ち
- 8 方当論次動 方に当に次動を論ずべし」

【日本語訳】

- 1 長安の東にある桃林の砦は千里も続く要害の地
- 2 そこに物見の騎兵が前後もなく次々にやって来る
- 3 「これはいったい何をなされようというのか」と問えば
- 4 「霍將軍様が冠軍侯に封ぜられるのでございます
- 5 凱旋される軍旗は電光の先駆けとなるほど素早く
- 6 都に帰還される車は空を行く雲といっしょに向きを変えてお帰りです
- 7 古えの傳説のような天子の補佐役となられるべく
- 8 勲功の大小が今まさに論じられているのです」と

【校勘】

○『古詩紀』卷百三十一 異同無し

【押韻】「紛」「軍」「雲」「勳」、上平二十文韻。

【作者】

五二三？～五九三？。隋代の学者、詩人。字は栖鳳。十七歳の時、梁、北周、隋に仕え、隋の文帝が即位すると国子博士に除せられた。開皇（五八一～六〇〇）末年、国子祭酒となり官に卒した。『周易講疏』十三卷などの著作の他に『文集』十卷があった。現存する詩は六首。

【語釈】

1 桃林千里陰 2 候騎乱紛紛

「桃林」砦の名。河南省靈宝市の西、長安の東にあった。漢・張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「左有崤函重險、桃林之塞。（左に崤・函の重險、桃林の塞有り。）」とあり、薛綜注に「崤及函谷関、桃林皆在長安東、故言左。（崤、及び函谷関、桃林皆長安の東に在り、故に左と言ふ。）」とあり、李善は『春秋左氏伝』文公十三年に「春、晋侯使詹嘉処瑕、以守桃林之塞。（春、晋侯、詹嘉をして瑕に処り、以て桃林の塞を守らしむ。）」とあるのを引く。

「險」地勢が険しく防衛の要となる地。

「候騎」偵察を任務とする騎兵。『史記』匈奴列伝に「漢孝文帝十四年、匈奴单于十四万騎入朝那・蕭関、殺北地都尉印、虜人民畜産甚多、遂至彭陽。使奇兵入烧回中宮、候騎至雍甘泉。（漢の孝文帝十四年、匈奴の单于、十四万騎、朝那・蕭関に入り、北地都尉印を殺し、人民畜産を虜にすること甚だ多く、遂に彭陽に至る。奇兵をして入りて回中宮を焼かしめ、候騎、雍の甘泉に至る。）」とあり、『索隱』は「崔浩云、『候、邏騎』。（崔浩、云ふ、『候、邏騎なり』）」とする。詩では梁・何遜「見征人分別」詩に「候騎出蕭関、追兵赴馬邑（候騎、蕭関を出で、追兵、馬邑に赴く）」。

「乱紛紛」秩序なく入り乱れる様。斉・王融「古意」詩二首（『玉台』巻四）其二に「況復飛蜚夜、木葉乱紛紛（況んや復た飛蜚の夜、木葉 乱れて紛紛たるをや）」と見える。

3 問此将何事 4 嫖姚封冠軍

「問此将何事」これはいつたい何事かと訊ねる。「問此」は樂府にしばしば見られる。例えば、漢・無名氏「陌上桑」（『玉台』巻一作「日出東南隅行」）『宋書』樂志作「艶歌羅敷行」の「使君遣吏往、問此誰家姝（使君 吏を遣はし往かしめ、問ふ 此れ誰が家の姝ぞと）」など。

「将何事」いつたい何をしようとしているのか。『春秋左氏伝』昭公十二年に「且夫易不可以占陰、将何事也。（且つ夫れ易は以て陰を占ふべからず、将に何をか事とせんとするや。）」と。

「嫖姚封冠軍」漢の霍去病の事跡をいう。对匈奴戦での軍功によって冠軍侯に封ぜられたことから。『史记』衛將軍驃騎列伝に「於是天子曰、『剽姚校尉去病斬首虜二千二十八級、及相国・当戸、斬单于大父行籍若侯産、生捕季父羅姑比、再冠軍、以千六百戸封去病為冠軍侯』。（是に於いて天子 曰く、『剽姚校尉去病 斬首虜二千二十八級、相国・当戸に及び、单于の大父行籍若侯産を斬り、季父羅姑比を生捕し、再び軍に冠たり、千六百戸を以て去病を封じて冠軍侯と為す』と。）」とある。梁・吳均「辺城将」

詩四首其一に「爾時始応募、来投霍冠軍（爾の時始めて応募し、来たりて霍冠軍に投ず）」。

5 回旌引流電 6 帰蓋転行雲

「回旌」都に帰還する軍旗。転じて凱旋する軍。陳・潘徽「贈北使」詩に「迴旌逗隴左、返軸指河源（迴旌 隴左に逗まり、返軸 河源を指す）」と。

「引流電」「引」は先導する。「流電」はいなびかり。速いことを表す。晋・陶潜「飲酒」詩二十首其三に「一生復能幾、倏如流電驚（一生 復た能く幾ぞ、倏やかなること 流電の驚くが如し）」

「帰蓋」帰還する車。「蓋」は車蓋、車を覆うパラソル。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「行雲」空を行く雲。三国魏・曹植「浮萍篇」（『玉台』巻二に「行雲有返期、君恩儻中還（行雲 有返る期有り、君恩 儻しくは中ごろ還らん）」とある。車蓋は車を覆うので、しばしば雲に喩えられる。

7 待任蒼龍傑 8 方当論次勳

「待任」君主の任用を待つ。『韓非子』有度に「古者世治之民、奉公法、廢私術、專意一行、具以待任。（古者 世治の民は、公法を奉じ、私術を廢し、意を専らにし行ひを一にし、具して以て任を待つ。）」と見えるが、六朝詩には他の用例が見当たらないようである。

「蒼龍傑」殷の傳説のような天子の良き補佐となる人。

「蒼龍」は中国古代の星座である二十八宿の内、東方の七宿の総称。傳説が死んだ後、天に昇って星となったという伝説があった。陳・徐陵「司空徐州刺史侯安都德政碑」に「神賜英賢、殷帝感蒼龍之傑。（神 英賢を賜ひ、殷帝 蒼龍の傑に感ず。）」とあり、許逸民校箋『徐陵集校箋』（中華書局 二〇〇八）は『莊子』大宗師の「傳説得之、以相武丁、奄有天下、乘東維、騎箕尾、而比於列星。（傳説之れを得て、以て武丁を相け、奄ねく天下を有ち、東維に乗り、箕尾に騎がりて、列星に比なれり。）」とあるのを引いて「按、箕星、東宮蒼龍之末宿。」とする。

「方当」間もなくきつと。「将要」「会当」の意。王雲路『六朝詩歌語詞研究』（黒龍江教育出版社 一九九九）は「『方当』即方、将要的意思。『当』附于『方』之後、構成双音節副詞。『当』作為副詞後附加成分、可與許多单音節副詞相結合。（『方当』は『まさに』『今にもくし』そうである）の意。『当』は『方』の後ろに置かれ、複音節副詞を構成する。『当』は副詞の後置成分として、多くの单音節副詞と結合することができる。」と説明する。

「論次勳」功績の大小を調べ、順序をつける。六朝詩には他の用例は見当たらないので、文脈によって解した。

【本文及び書き下し】

- 1 巫山巫峽長 巫山 巫峽 長く
- 2 垂柳復垂楊 垂柳 復た垂楊
- 3 同心且同折 心を同じくし 且つ同に折る
- 4 故人懷故郷 故人 故郷を懷はん
- 5 山似蓮花艷 山は蓮花の艷やかなるに似
- 6 流如明月光 流れは明月の光くが如し
- 7 寒夜猿声徹 寒夜 猿声 徹し
- 8 遊子淚霑裳 遊子 涙 裳を霑す

【日本語訳】

- 1 「巫山も巫峽もどこまでも続き
- 2 枝垂れ柳、また枝垂れ柳
- 3 出発の時、お帰りまでの無事を祈って、二人でいっしょに柳の枝を折りました
- 4 （柳の絡み合った二本の枝は折れる時にはいっしょに折れることでしょう）
- 4 あの人もきつと故郷にいる私を思ってくれているでしょう」
- 5 「巫山は峰々がハスの花のように艶やかで
- 6 巫峽の流れは明るい月のように光っている
- 7 この寒い夜、両岸から猿の鳴き声が響き渡り
- 8 俺は涙が裳裾を濡らすのだ」

【校勘】

○『芸文類聚』巻八十九・『文苑英華』巻二百八・古

梁・元帝「折楊柳」

詩紀』卷八十・『漢魏六朝百三家集』梁元帝集

0 「折楊柳」、『類聚』作「折楊柳詩」。

1 「巫山」、底本原作「山高」、注云「拠『詩紀』卷七〇・《百三家集》改」。『英華』注云、「一作『山高』」。

3 「且」、『類聚』作「宜」。『英華』注云、「一作『宜』」。

【押韻】

「長」「楊」「郷」「裳」、下平十陽韻。「光」、下平十一唐韻。陽・唐同用。

【作者】

五〇八〜五五四。梁の第三代皇帝（在位五五二〜五五四）。武帝（蕭衍）の第七子、昭明太子蕭統、簡文帝蕭綱の異母弟。湘東王に封ぜられ、江陵に鎮して重きをなし、簡文帝を擁する侯景に対抗した。外からは西魏の侵攻を受け、王室内部の抗争もあって、在位二年あまりで没した。『金樓子』六巻をはじめとする多くの著作がある知識人であり、詩作もよくした。

【語釈】

0 折楊柳

「折楊柳」『樂府詩集』卷二十二・横吹曲辞二・漢横吹曲二「折楊柳」の題下には、

『唐書』樂志曰、「梁樂府有胡吹歌云、『上馬不捉鞭、反拗楊柳枝。下馬吹横笛、愁殺行客兒』」。

此歌辭元出北国、即鼓角横吹曲『折楊柳枝』是也。『宋書』五行志曰、「晋太康末、京洛為折楊柳之歌、其曲有兵革苦辛之辭。」

『唐書』樂志に曰く、「梁樂府に胡吹歌有りて云ふ、『馬上上るも鞭を捉らず、反つて楊柳の枝を拗る。馬を下りて横笛を吹き、行客の児を愁殺す』と。此の歌辭 元北国に出で、即ち鼓角横吹曲の『折楊柳枝』 是れなり」と。『宋書』五行志に曰く、「晋の太康の末、京洛 折楊柳の歌を為し、其の曲に兵革苦辛の辞有り」と。

とあり、斉・梁に流行した「折楊柳」が北方の樂曲であつたとする。また、増田清秀『樂府の歴史的研究』（創文社 一九七五）には、

ところで、凡そ、南朝つまり梁・陳の横吹曲の作家たちは、いずれの横吹曲を作辞する場合でも、主に漢代の故事を取材するか、或いは、その時代を想像して作辞しているから、ここ「折楊柳」の新曲においても同様で、彼らが作辞に当って意識に上せたのではないかと憶測される故事がある。漢人の著作といわれる三輔黄図にそれが記されている。

霸橋。在長安東。跨水作橋。漢人送客至此橋。折柳贈別。王莽時。霸橋災。數千人以水沃救不滅。更霸橋為長安橋。（張闡声校定六卷本）

霸橋は前漢の世、長安の人たちの送客別離の場

であり、木造の橋だつたらしく、王莽の時代に焼失するまで、その橋上で「折柳贈別」が行われたと、この書にいう。しかし、実は、この書の文が

信憑性に乏しい。清の孫星衍・莊遠吉は、同じ三輔黄図を校定するに当って、右の文中の「漢人送客至此橋。折柳贈別」の十一字を、後世の者が妄りに加えたものであると判断して、みな削り去っている。いま、孫・莊の下した判断を、資料的見地から糾すと、それが妥当のように思われる。

と、「折柳贈別」が斉・梁の頃の新しい習わしだつたとする。「折楊柳」については他に岡村貞雄『古樂府の起源と継承』（白帝社 二〇〇〇）、向島成美『漢詩のことば』（大修館書店 一九九八）に詳しい。

1 巫山巫峽長 2 垂柳復垂楊

「巫山」四川省重慶市巫山県と湖北省の境にある山。間に長江が流れ、巫峽を形成する。

「巫峽長」巫峽がどこまでも続く。晋の頃の民歌とされる「巴東三峽歌」（『文選』卷十二・郭璞「江賦」李善注引盛弘之『荊州記』）に「巴東三峽巫峽長、猿鳴三声涙沾裳（巴東 三峽 巫峽 長く、猿鳴 三声 涙 裳を沾す）」とあるのに基づくだろう。

「巫峽」は三峽の一。三峽は四川省重慶市奉節県から湖北省宜昌市までの間に長江上流から瞿塘峽・巫

峽・西陵峽と続く三つの峽谷。古来、船の往来の難所として知られる。

「垂柳」柳。枝が垂れ下がることから。梁・簡文帝「長安道」に「落花依度幘、垂柳払行輪（落花 度幘に依り、垂柳 行輪を払ふ）」とある。「幘」は車のほろ。

「垂楊」柳をいう。「柳」は枝が垂れ下がるヤナギ、「楊」は枝の垂れないヤナギだが、詩文ではしばしば通用する。斉・謝朓「鼓吹曲」（『文選』卷二十八、「謝宣城集」作「隋王鼓吹曲十首・入朝曲」）に「飛甍夾馳道、垂楊蔭御溝（飛甍 馳道を夾み、垂楊 御溝を蔭ふ）」と。

3 同心且同折 4 故人懷故郷

「同心」恋人同士が約束を交わす。「古詩十九首」（『文選』卷二十九）其六に「同心而離居、憂傷以終老（心を同じくして離れ居み、憂ひ傷んで以て終老せん）」とあり、李善注は『易』繫辭伝上に「二人同心、其利断金。（二人 心を同じくすれば、其の利きこと 金を断つ）」とあるのを引く。また、二本の枝が螺旋状に絡み合うこと。梁・武帝「飲聞歌」（『玉台』卷十。『樂府詩集』卷四十四作王金珠「飲聞變歌」）二首其二に「南有相思木、含情復同心（南に相思の木有り、情を含みて復た心を同じくす）」と。この句、或いは双関語を用いるか。

「同折」二人でいっしょに手折る。或いは二本の枝が

いっしょに折れてしまふ。梁・江淹「傷友人賦」に「黯くろと秋草同折、今不復見矣。（黯として秋草と同じに折れ、今復た見えざるなり。）」とあるが、これは友人が秋の草が枯れるのと時を同じくして世を去ったことをいう。

「故人」遠くにいる夫をいう。「古詩十九首」〔『文選』卷二十九〕其十八に「相去万余里、故人心尚爾（相去ること 万余里、故人心 尚ほ爾り）」と。

「懷故郷」故郷を懐かしむ。晋・陸雲「九愍」修身に「念茲涉江、懷故郷兮。（茲れを念ひて江を涉り、故郷を懷ふ。）」と見える。前半四句は長江を上り下りしているであろう恋人を故郷で思う女性の歌として解した。

5 山似蓮花艷 6 流如明月光

「山」巫山。巫山には十二の峰々があり、それらがハスの花のような形に見えることをいう。後の例だが李白「蓮花」ハスの花。「荷花」「芙蓉」とも。語は早く漢・無名氏「古絶句」四首（『玉台』卷十）其二に「何用通音信、蓮花玳瑁簪（何を用てか音信を通じ、蓮花 玳瑁の簪）」と見える。

「流」巫峡を流れる長江。

「如明月光」長江の水面が満月ほど明るく輝く。宋・南平王劉鑣「白紵曲」に「状似明月汎雲河、体如輕風動流波（状は明月の雲河に汎かぶに似、体は輕風

の流波を動かすが如し）」とある。

7 寒夜猿声徹 8 遊子淚霑裳

「寒夜」秋や冬の寒さ厳しい夜。晋・陶潜「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」に「夏日抱長飢、寒夜無被眠（夏日 長き飢ゑを抱き、寒夜 被無くして眠る）」と。

「猿声徹」サルの鳴き声が遠くまで響き渡る。「猿声」は「巫峡長」の語釈に引いた「巴東三峽歌」を参照。「声徹」は音がくしまで届く。『論衡』紀妖に「音中宮商之声、声徹於天。（音 宮商の声に中たり、声 天に徹す。）」とある。

「遊子」故郷を離れ旅に出た人。また長く異郷にある人。ここは長江を上り下りしている夫の自称と解した。「古詩十九首」〔『文選』卷二十九〕其一に「浮雲蔽白日、遊子不顧反（浮雲 白日を蔽ひ、遊子 顧反せず）」と。

「淚霑裳」溢れる涙が裳裾を濡らす。これも「巫峡長」の語釈に引いた「巴東三峽歌」を参照。「霑」は「沾」に通じる。後半四句は旅のみである夫の歌として解した。

※本稿は平成二十八年年度科学研究費基盤研究（〇）「言語実験の場としての六朝楽府に関する研究」（課題番号二六三七〇四一〇）の助成を受けたものである。